生活介護事業における作業療法実践事例集

一般社団法人　日本作業療法士協会
制度対策部　障害保健福祉対策委員会

2020年3月

作業療法実践事例集について

障害者総合支援法における障害福祉サービスのひとつに「生活介護事業」がある。この事業は、介護を必要とする方に対して、主に日中の入浴・排せつ・食事等の介護、調理・洗濯・掃除等の家事や生活等に関する相談・助言、その他の必要な日常生活上の支援、創作的活動・生産活動の機会の提供のほか、身体機能や生活能力の向上のために必要な援助を行うこととなっている。

制度対策部障害保健福祉対策委員会が2019 年 2 月に発出した「生活介護事業における作業療法の実態に関する調査報告書」＊では、生活介護事業所での支援対象者は、主たる疾患・障害に加え、身体障害・知的障害・精神障害・老年期障害を抱えるなど重複障害の人が多く、生活介護事業所で働く作業療法士は、幅広い知識を持ち、多様な障害に対応できる作業能力を発揮していることが分かった。そこで今回、障害福祉領域における作業療法の姿を示すことで、医療と福祉の連携や福祉領域への介入意識を高めることを目的に、全国の作業療法士の協力を得て生活介護事業所での貴重な支援事例を集積整理し、周知することにした。

本報告が生活介護事業に携わる多くの方々の目に触れ、作業療法士の活用により利用者の活動と社会参加が推進されることを期待する。

＊　http://www.jaot.or.jp/wp-content/uploads/2019/04/201902_OT_in_seikatsukaigo.pdf

実践事例　目次

個別支援事例

No. 1 電動車いすを使いこなすことによりひとりで外出ができるようになった事例

No. 2 AIスピーカーとスマートリモコンの導入により家電操作が可能になった事例

No. 3 生活介護施設を経由した脊髄損傷者の地域移行～多職種間連携により入所施設から地域移行を目指した一事例～

No. 4 創作活動の中で運動感覚の再学習をして、日常生活で出来ることが増えた事例

No. 5 風に吹かれた股関節変形（WD）に対する筋緊張の緩和とポジショニングの改善により腰部の痛みが消失した事例

No. 6 趣味活動だったPCでの作業が、施設での役割を担うことで、仕事としても広がってきた事例

No. 7 通院の困難さに対し、代償手段（電話の使用）を獲得することで通院が可能になった事例

No. 8 個別支援を通して孤立した生活から社会参加の拡がりが期待された事例

No. 9 生活・行動面の課題を支援し、施設からグループホームでの地域生活が可能となった事例

No.10 応用行動分析の手法を介して施設での定番作業が可能となった強度行動障害を有する事例

No.11 こだわりの強い自閉症の方に対するスケジュール帳の活用により、作業と生活が安定した事例

No.12 強度行動障害の自閉症スペクトラムの方に対して構造化した作業活動を提供し、他害行為などが減少した事例

No.13 ストレッチ動作への緊張が環境調整とポジティブフィードバックにより和らぎ、移動や情緒の安定に繋がった事例

No.14 日常生活を無為に過ごしていた方がお菓子作りを通して活動性が向上した事例

No.15 明確な目標が日々の生活に影響を与えた事例

No.16 入院による身体機能低下から、生活能力が改善し、単独での受診・外出も可能となった事例

No.17 高齢化が進行している知的障害者施設においての作業療法士の働きかけ

集団支援事例

No.18 姿勢崩れの見られる利用者に対し食事をしやすくするため、シーティングに介入した事例

No.19 脳性麻痺者に対する二次障害の予防の取組み

No.20 重度障害者支援施設における手洗い支援

No.21 ロールピクチャーの制作を通し楽しみの獲得、自己表現の拡大につながった事例

No.22 意思決定支援とグループ活動を通して拡大した利用者の主体的参加

ー他職種連携で行った5年間の意思決定支援の活動とプロセスー

No. 1	報告者	藤井広樹　（障害者支援施設清湖園）

分野：身体／精神／知的／重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

電動車いすを使いこなすことによりひとりで外出ができるようになった事例

年齢・性別：　５０歳代・男性	疾患名：脳性麻痺(四肢麻痺)	手帳など：身体障害者手帳一種一級・区分６

全体像　両親と祖母との4人暮らし、正常分娩であったが7か月の時、腸炎により脱水状態になり障害を負う。
養護学校高等部卒業後施設入所（Ｓ57年12月から）ﾘｸﾗｲﾆﾝｸﾞ式介助型車いすを足で蹴って後ろに
進んでいた。ADL全介助　Ｈ15年頃より車いす移動困難となる。

希望　一人で大阪（難波）に行きたい

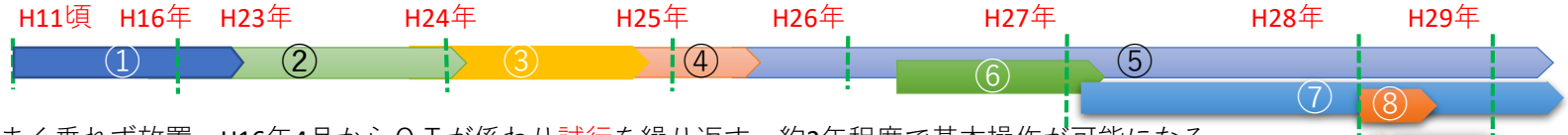
評価　ﾍｯﾄﾞﾎﾟｲﾝﾀｰを使いﾊﾟｿｺﾝのｲﾝﾀｰﾈｯﾄを利用。知的レベルは日常生活上支障はなし。
言語は努力性で単語ﾚﾍﾞﾙ、慣れていても理解に時間がかかる。

旧電動

目標　電動車いすを日常的に使用し一人で外出できるようになる。（課題）ﾁﾝｺﾝﾄﾛｰﾙﾚﾊﾞｰを操作するため乗車姿勢の安定化

計画　①旧電動車いすでの試行:体幹の変形に合わせた背ｼｰﾄの検討　②新しい電動車いす作成(快適な乗車)
③試乗し改良 ④完成 ⑤施設での日常的な使用　⑥屋外走行練習　⑦交通機関の利用　⑧行政への働きかけ

介入・経過



①旧電動作成後、うまく乗れず放置、H16年4月からＯＴが係わり試行を繰り返す。約2年程度で基本操作が可能になる。
②新しい電動を作成する手続き開始、Ｈ18年11月更生相談所の判定を受ける。Ｈ19年4月交付券が下りて作成へ。
③基本的な形ができ、実際に走行しながら調整、改造を重ねていく。電源ｽｲｯﾁとｺﾝﾄﾛｰﾙｱｰﾑを自力で操作する方法の提案(Ｈ23年8月)
④電動ｱｰﾑ改造の申請し修理交付券届く(Ｈ24年11月）改造作業開始(Ｈ25年1月）完成（6月）
⑤屋内の乗車時間を伸ばしていくために背ｼｰﾄの調整をしながら日中使用していく。(半日から）並行して屋外走行を職員と一緒に買物などで練習。
⑥単独で外出できるかの見極め完了(Ｈ26年9月）ほぼ毎日近所のスーパーやコンビニ、散歩に出かける。
日よけの作成(Ｈ27年）案内盤の作成
⑦ボランティアを見つけ交通機関を利用して出かける。(京都や大阪など）その中で単独で難波に行きたいと思いだす。
しかし実際職員と何回か出かけるが長時間の外出になり、解決できない課題を本人も自覚していく。(Ｈ29年）
⑧ﾍﾙﾊﾟｰの利用ができないか出身市町村の障害福祉課にかけあう(重度訪問介護）Ｈ29年7月に利用開始　町内は単独で
以降ヘルパーと一緒に遠方への外出を行っている。

結果・まとめ

日常生活での電動車いすの実用化は長い時間をかけて本人と試行錯誤しながらようやく達成された。町内の外出は単独で出かけて買い物などをできるようになる。最終的な希望である交通機関を使っての外出は単独では言語や環境面で難しかった。しかし行政に働きかけてヘルパーと一緒に定期的に出かけられるようになった。

＊本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

No. 2	報告者	吉機千恵　（障害者支援施設ナーシングピア加西）

分野：身体／精神／知的重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

AIスピーカーとスマートリモコンの導入により家電操作が可能になった事例

年齢・性別：６０歳代・男性	**疾患名**：全身熱傷後遺症	**手帳など**：身体障害者手帳１級　障害支援区分６

全体像　全身熱傷（Ⅲ度）により、植皮手術8回、両側上腕切断、左眼球摘出術を施行。右眼視力は光を感じる程度。経済状況は良好。10数年前より施設入所中。家族は遠方に住まれており、自宅介護は困難であるため、今後も施設入所継続予定。

評　価　ADL全介助。両下肢は可動域制限重度で脚長差約3cmあり。認知機能問題なし。言語コミュニケーションは良好。

訓練内容及び経過

・訓練開始時はベッド上寝たきりの状態。ベッドサイドにて両下肢の関節可動域訓練と筋力訓練を行う。
・訓練開始後4か月、ティルト・リクライニング式車いすを作成して離床を促し、訓練室での訓練に変更。
・訓練開始後3年、補高靴を作成し、心肺機能向上を目的にティルトテーブルによる立位保持訓練を追加。介護タクシーを利用して個人外出可能となった。
・現在は、両下肢の皮膚状態悪化のため、立位保持訓練は中止している。

希　望　好きな音楽やラジオが自由に聞きたい。家電の操作ができるようになりたい。

目　標　AIスピーカーを導入する。家電（テレビ・エアコン）の操作ができるようになる。

支援内容　①Wi-Fi環境を整える　②外出サービスを利用して携帯電話をスマートフォンに契約変更する　③AIスピーカーの購入と初期設定を行う　④スマートリモコンの購入と設定を行う

介入・経過

①入所中の施設にWi-Fi環境が整っていなかったため、配線・工事不要なホームルーターの契約を行い、Wi-Fi環境を整えた。
②利用中の携帯電話がスマートフォンではなかったため、施設の外出サービスを利用してスマートフォンに契約変更した。
③AIスピーカー（Google Home）を購入し、機器の設置、スマートフォンへの専用アプリのダウンロード、アカウントの作成、AIスピーカーの初期設定を行った。
→これにより、すきな音楽やラジオを自由に聞けるようになった。
④スマートリモコン（Nature Remo）を購入し、音声で家電操作ができるように設定した。
→これにより、テレビ電源のON-OFF・チャンネルの切り替え・ボリューム操作、エアコン電源のON-OFF・温度調整が可能となった。

結果・まとめ

AIスピーカーの利用により、好きな音楽やラジオが自由に聞けるようになった。またスマートリモコンを導入することで、テレビやエアコンの操作が自分でできるようになった。

＊本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

No. 3	報告者	久野誠　（中伊豆リハビリテーションセンター 障害者支援施設わかば）

分野：身体／精神／知的重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

生活介護施設を経由した脊髄損傷者の地域移行～多職種間連携により入所施設から地域移行を目指した一事例～

年齢・性別：60歳代・男性	**疾患名**：脊髄損傷（Th10）障害名：不全対麻痺（Frankel C）	**手帳**：身体障害者手帳1級

全体像・評価・希望

key person：姉(B県在住)．　ニーズ：C県での生活．　経歴：30年以上C県で単身生活．調理師として就労．性格：気分の波が激しく精神科通院歴あり．

経　過：X年椎間板ヘルニアのOpe後に脊髄損傷を受傷．X＋1年回復期病院、療養型病院を経て当施設入所．

OT評価：両側平行棒把持にて10秒立位は可能．ADLは車椅子使用し入浴以外自立，IADLは買い物・外出は未実施．認知機能・精神機能は年齢相応．

目　標　C県で単身生活をしたい

計　画　OT，サービス管理責任者，相談支援専門員中心に心身共に地域移行準備を進め，c 県での単身生活の再開．

介入・経過

(1)前　期　(X＋2年5ヶ月～X＋3年3ヶ月)

生活動作訓練：入浴は浴槽台を使用し自立．屋外走行や外出・買い物訓練，公共交通機関の使用を通じ，自身の能力向上と社会資源を獲得．

精 神 的 支 援：将来に対する不安・焦燥感により精神的不調に陥る．Ns・生活支援員に服薬調整，安心できる生活確保を依頼し経過観察．状態が落ち着いた頃に，サービス管理責任者より意思確認を行った所，「地域生活をしたい」と奮起され再介入となる．

(2)中　期　(X＋3年4ヶ月～X＋3年8ヶ月)

単身生活実習：生活体験室(１Kの居室・キッチン・風呂・トイレ)を使用し生活体験を二週間実施．生活支援員・PT・OTが生活上の助言，看護師・管理栄養士に健康管理，栄養指導を依頼．継続的に作れる調理を実践．調理は栄養面を考慮し配食サービスを併用．

ケ ア 会 議：ケースワーカー・相談支援専門員・OTにて行政担当者とのケア会議の実施．地域移行支援事業の利用開始．

(3)後　期　(X＋3年9ヶ月～X＋4年3ヶ月)

地域移行支援事業：A氏，地域移行支援事業の相談支援専門員にて物件を選定．PT・OTが住宅改修案を策定．脊髄損傷者向けの自宅環境は特殊な改修もある為，福祉機器業者や加工業者，大家，不動産業者と多くの人の協力を依頼．退所日直前にケア会議，住環境調整をA氏宅で実施．ADLは問題なく同日より試験外泊．問題見られず地域移行となる．

結果・まとめ

・地域移行から1年経過．生活環境に順応しADL・単独外出は自立．日中は通所施設を利用し，趣味活動を楽しまれている．

・相馬(2012)は，地域移行にはADL・IADL能力，支援体制の充実，本人の意欲が重要と述べている．長期経過の中で，まずは利用者の真のニーズの抽出，そして意欲に沿った生活訓練や多職種連携の促通と生活介護施設のOTの役割は多岐に及ぶ．

＊本事例報告掲載に対し，対象者からの同意を得ている

No. 4	報告者	杉山いずみ　（小さき花の園）

分野：身体／精神／知的／重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得／維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

創作活動の中で運動感覚の再学習をして、日常生活で出来ることが増えた事例

年齢・性別：　40歳代・女性	**疾患名**：脳性麻痺	**手帳など**：障害者手帳1級、障害支援区分6

全体像
グループホームで生活し、同市内に両親が在住しており支援を得ること可能。ＡＤＬ介助必要であるが、電動車いすで移動し、パソコンで詩を書いたりメールなどを行う。利き手は左。

評価
床上は膝歩きで移動し床座位保持可能で、後方から体を抱えて立ち上がり・数歩足を出す。アテトーゼ四肢麻痺で、手操作時に不髄位運動出現し、頑張る気持ちがより肩甲帯の筋緊張を高めていた。肩こり・腰痛の訴えあり。コミュニケーションは日常的会話可能、口頭での表出は聞き取り困難なため文字版の指さしで行う。

希望
自分で出来ることは自分でやりたい。新しいことにチャレンジしたい。色々な人と話がしたい。

目標　運動感覚に注目し、筋緊張のコントロールをして、左手で創作作業ができる。
計画　①介助運動で自分の体の動きを感じる。②柔らかい素材の感触を感じる。③本人が創作作業の提案をする。　④作業後に体の感じや達成状況の振り返り、次回作業を行う際の注意点を話し合う。

介入・経過
①～④を継続して行う。
①他動運動で左肩・肘・手関節をゆっくり動かし、関節運動に注目する。
②ビーズクッションやソフト粘土など柔らかい素材に触れる。
③絵画・刺し子・刺繍・化粧などを左手介助にて行い、介助量を調整する。
④作業終了時に体を動かした感覚や達成度、生活の中での変化などを話すなかで、肩の力が抜きやすくなる。手首の使い方や指がバラバラに使えること、深呼吸や好きな音楽をイメージすると力が抜けるようになる。達成度は10点中何点だったかで表現する。

結果・まとめ
本人から「肩・肘の力が抜けるようになり、力を入れなくて良いことが分かった。手の平での洗顔や化粧が出来るようになった。車いすのレバー操作やピアノを弾く際に、手の動きをコントロールしやすくなった。コップの取っ手を持って、水が飲めるようになった。」と報告があった。本人が毎年作成しているポエムカレンダーに、「リハビリでイメチェン」という詩を掲載した。筋緊張をコントロールして創作活動で行ったことで、日常生活の活動において出来ることが増えた。

＊本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

No. 5	報告者	佐々木充直　（特定非営利活動法人かたつむり　いちご）

分野：身体／精神／知的重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

風に吹かれた股関節変形（WD）に対する筋緊張の緩和とポジショニングの改善により腰部の痛みが消失した事例

年齢・性別：30歳代・女性	**疾患名**：脳性麻痺（四肢麻痺）	**手帳など**：身体障害者手帳１級

全体像　アテトーゼ型で四肢麻痺。右上肢でのスイッチ入力により、パソコンでメールを作成できる。

評　価　頸部筋の亢進が強くATNR出現。軽度の側弯症を併発。風に吹かれた股関節変形（WD）による痛みがある。

希　望　パソコンを続けたい。左側腰部の緊張とそれに伴う痛みを何とかして欲しい。

目　標　楽なポジショニングをとれるよう、全身の筋緊張の亢進の緩和を行う。

計　画　頸部の筋緊張を抑制して他の部位へ緊張が入らないようにする。WDの改善。

介入・経過

①介入当初（X－10年）、WDのために骨盤にねじれが生じて痛みがあったために、午後のベッドでの休息時間には伏臥位で過ごしていた。
②初回のリハビリ計画時に、週２回程度から膝の下にクッションを入れて仰臥位で過ごすよう、誘導していった。
WDは左内転筋群の緊張によるもので、同時に右外転筋群に短縮が見られたことから、頸部などの緊張の緩和とともに、WDへのアプローチを進めていった。
③X－３年、左内転筋群と右外転筋群に改善がみられるようになり、焦点化したアプローチとして、右内転筋群を活用して左下肢の内転・内旋を抑制するよう、働きかけを行った。
④X－１年より改善が顕著となり、現在は声掛けにより右内転筋群を使ってのポジショニングの改善が出来るようになった。

結果・まとめ
左腰部の痛みは既に消失しており、クッションを小さくすることを検討中である。改善まで長期間を要したが、全体の筋緊張の亢進を緩和させることを継続していった結果、焦点化が出来たもので、これまでベッドでの休息は痛みが出ない伏臥位で過ごしていたが、より楽な姿勢である仰臥位で過ごせるようになった。

＊本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている

No. 6	報告者	工藤優　（多機能型支援施設アップル）

分野：身体／精神／知的重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

趣味活動だったPCでの作業が、施設での役割を担うことで、仕事としても広がってきた事例

年齢・性別：20歳代・男性	**疾患名**：脊髄性筋萎縮症Ⅱ型	**手帳など**：身体障害者手帳1種1級、障害支援区分6

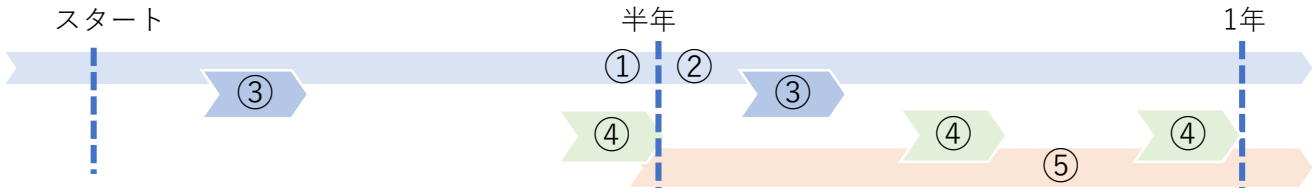
全体像　両親、弟、妹と5人暮らし。MMT1～2、関節拘縮強く、ADLには概ね介助を要す。電動車椅子を使用し自操可能。セッティングには介助を要すが、PCにてイラストや名刺作成が得意で、将来はデザインの仕事をしたい希望があるが、就労支援施設等の利用を含め難しい状態が続いていた。

希　望　本人）現在のサービスをこのまま継続したい。母）今まで通りのケアをお願いしたい。

目　標　現在の生活の維持（電動車椅子、PC操作等を含め）

計　画　①ROMex　②自動介助運動　③名刺作成　④施設行事等のイラスト等作成　⑤自己アピールのポスターの作成

介入・経過



①②：介入当初から著変なく維持することができている。
③④：当施設職員の名刺データの作成、施設行事でのランチョンマット、イラスト、ポスター等作成する。納期やマナー等問題なく行う事可能。
⑤：施設内に掲示する事で、施設の来客者等への広報を行う。

結果・まとめ

身体機能は維持できており、車椅子やPC操作を継続して行うことができている。イラスト作成などは趣味活動の一環であったが、③④が練習の場となり、自己アピールのポスターを見た来客者から名刺作成の注文をいただくことができた。（本人と来客者で相談し進めている。）また、本人を知る方からPC教室の講師依頼の相談等があり、活動の幅が広がる様子が見られている。

＊本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

No. 7	報告者	非公開

分野：身体／精神／**知的**／重心／その他	形態：**個別**／集団／連携	内容：**生活機能の獲得・維持・向上**／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／**環境調整**／その他

通院の困難さに対し、代償手段（電話の使用）を獲得することで通院が可能になった事例

年齢・性別：６０歳代・女性	**疾患名**：知的障害、変形性膝関節症	**手帳など**：療育手帳B、障害支援区分４

全体像　80代後半の要介護の母と二人暮らし。生活保護世帯。ADL、通院（週３）や買い物も自立していたが、引っ越しし、更に膝の痛み・膝折れもあり困難になってきた。経済的な問題等もあり、携帯電話所持は難しい。

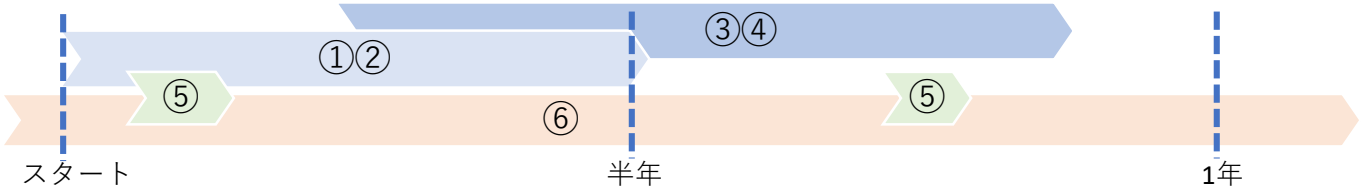
希　望　本人）買い物や病院に歩いて行くのが大変。おじさんか弟に電話できれば迎えに来てもらえる。
母）今後の健康不安もあるので、何かあった時に電話が掛けられるといい。

評　価　200m以上の歩行は両膝の痛みが伴い困難。通院、買物（500m先）などに行く必要があるが、交通量に比して道路が狭く、凹凸が多い。休める場所がない。言語コミュニケーションは良好。文字の識別は自分の名等一部のみ。模写は可能。

目　標　電話をかけられるようになる。買い物や通院ができる。変形性膝関節症の悪化防止・痛みの軽減。

作業療法計画　①数字の識別練習　②電話カードの作成　③実動練習　④電話マナーの確認　⑤資源の整理
⑥下肢筋力増強訓練・杖の使用

介入・経過



①数字のマッチング。間違えやすい数字に対してイメージ化しやすいよう促す。(他職種と協働で週1回）→6か月でおおよそ可能
②使用する電話番号をピックアップし、名前、写真、電話番号を載せたカードを作成。→他者にかけてもらうよう依頼することも。
③天気予報等の番号からはじめ、桁を伸ばして練習を行う。公衆電話からも行う。
④基本的な応答や、間違えた際の謝罪の方法などSSTを交えて行う。⇒①～④を取り組み10か月ほどで電話をかける動作が獲得
⑤通院は日を決め、送迎バスにスーパーや医院の近くで降車してもらうよう調整。
⑥下肢筋力強化、杖の歩行練習（他職種協働で毎通所時）→機能は維持。痛みは大きく変わらず。

結果・まとめ
電話ができるようになることや資源の整理をすることで通院の困難さが解消された。電話の使用は、通院以外の場にも般化され、困ったときの相談や通所を休む際も自分で連絡できるようになった。

＊本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

No. 8	報告者	知念和紀　（沖縄中央成育園 あおぞら荘）

分野：身体／精神／知的／重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

個別支援を通して孤立した生活から社会参加の拡がりが期待された事例

年齢・性別： ５０歳代・女性	**疾患名：** 知的障害（最重度）	**手帳など：** 療育手帳Ａ１　障害支援区分６

全体像

６歳時から施設へ入所、現在も入所生活を続けている。ADL遂行自主的に行動可能であるが、日中の大半は居室で過ごす事が多く、活動等へは拒否を示し参加は殆どない。また周囲の騒がしさも影響あってか食事摂取に波があり、体重が３５kgまで落ちた。

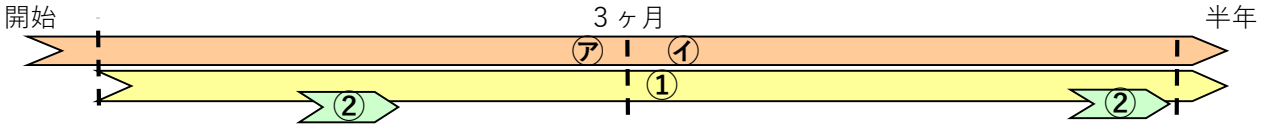
評価

言語的コミュニケーションは難しいが、これまでの経験からおおよその指示理解は可能。また外出支援を期待しているのか職員の声かけに対して反応は良い。

支援目標　体重増量　関係性の構築　　**支援計画**　㋐食事支援　㋑落ち着ける環境を提供

ＯＴ目標　社会参加の促進　　**作業療法計画**　①屋上へ移動して園芸活動　②買い物支援

介入・経過



㋐食事支援：落ち着いて食事が出来るように時間をずらして支援員付き添いで対応。

➡　４０kgまで体重増量した。

㋑居室で音楽鑑賞：落ち着く居室で馴染みのある童謡や演歌を流して過ごす。

➡　鼻歌を口ずさむ場面あり、支援員との交流増える。

①園芸：OTと一緒に屋上にあるハーブやミニトマトの苗に水掛けをする。

➡　習慣として定着、後半は収穫し、ハーブティーやトマトの試食を実施。

②買い物支援：徒歩片道１０分程のコンビニでコーヒー購入。

結果・まとめ

支援員とOTがそれぞれの視点で個別に関わる事で関係性の構築から体重が増える、園芸作業は習慣として定着するまでに至った。孤立的で一人で過ごす事が目立つため“一人で過ごすのが好き”と職員から評価されがちだが、集団の場に安心できる環境が無い、またはその経験の少なさから自身にとって”安心できる唯一の居室“を選択し、結果として孤立していたとも考えられる。本人にとって価値があり、安心できる人、場、作業は主体的な経験を促進し、社会参加の拡がりにも繋がると予測される。

＊本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

No. 9	報告者	平譯　麻理　（社会福祉法人徳充会　障害者支援施設　石川県精育園）

分野：身体／精神／知的／重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

生活・行動面の課題を支援し、施設からグループホームでの地域生活が可能となった事例

年齢・性別：５０歳代・男性	**疾患名**：知的障害	**手帳など**：療育手帳A、障害支援区分４

全体像　7歳頃～施設生活。10代後半で当施設に入所。身体機能面は障害なし。ADLは全般的に自立。IADLは声かけ・見守り必要。

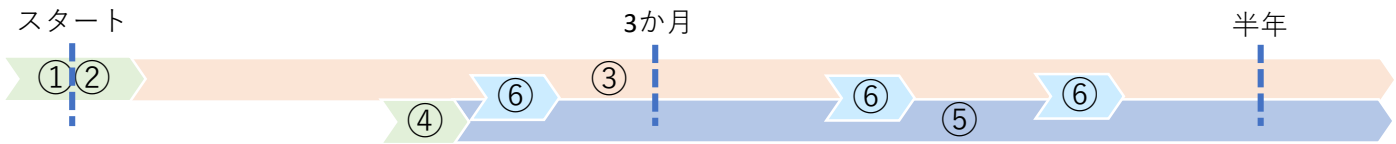
希　望　本人）グループホームで生活したい。
家族）可能ならグループホーム移行も考えてもらいたい。

評　価　知的機能は、田中ビネー知能検査で7歳。コミュニケーションは、基本的内容は理解・表出共に可能。文字の識別は自分の名前等一部のみ。本人はすぐにでもグループホームに移って生活できると自信を持っている。施設生活上は課題が複数あるが、本人は認識できていない状況。

目　標　生活上のルールを守り、グループホームに移行して、生活できる。

作業療法計画　①課題の共有②生活面のルール確認③生活面の支援④行動面のルール確認⑤行動面の支援⑥グループホーム体験

介入・経過



①本人と担当生活支援員と共に、アセスメントシートを確認し、課題の共有を行う。
②①のうち生活面の課題（髭剃り・歯磨き・着替え・洗濯）に対して、具体的な目標・ルールを本人と決める。
③生活面のルールについて、カレンダーとセットで、毎日確認できるよう視覚化し居室に掲示。他職種協働で毎日実施状況を確認。　→1か月で、①の課題４つとも毎日実施することができるようになる。
④①のうち行動面の課題（盗み・物損・大声・無断外出・対人トラブル）に対して、具体的な目標・ルールを本人と決める。
⑤行動面のルールを毎日確認、ルールを守りやすいよう環境調整も併せて行う。
⑥グループホーム体験時も毎日のルール確認を継続。体験ごとに顕在化した新たな課題に対し、順次ルールを変更し支援する。

結果・まとめ

3回のグループホーム体験を経て、支援から半年後にグループホームに移行した。行動面の課題については、毎日のルール確認と環境調整を軸とした支援により、現在も安定した生活を継続できている。

＊本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

No.１０	報告者	小笠原誠　（浜松市社会福祉事業団 生活介護・就労支援施設「かがやき」）

分野：身体／精神／**知的**／重心／その他	形態：**個別**／集団／連携	内容：**生活機能の獲得・維持・向上**／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／**環境調整**／その他

応用行動分析の手法を介して施設での定番作業が可能となった強度行動障害を有する事例

年齢・性別：２０歳代・　男性	**疾患名**：自閉症	**手帳など**：療育手帳A、障害支援区分６

全体像　突発的な興奮．大声，多動性・寡動性，自傷・他害が顕著．散歩などの活動的な課題への参加は可能だが，机上作業や創作課題には乗りにくく，集団で活動している意識は低い．

評　価　食事は右手中心でスプーン使用，手づかみが頻繁．利き手は曖昧．排泄は下腹部を叩くことでの訴えはあり．排尿は見守り．排尿と排便の区別，排便後の始末は困難．更衣は準備をしておけば前後、上下の誤りはあるものの着脱が可能．コミュニケーションは簡単な言語指示は入るものの自発語はなし．療育手帳A．障害支援区分６．強度行動障害判定基準の得点20点．

希　望（母）コミュニケーション手段が叩く，つねることなのでその行動を軽減してほしい．窓や鏡を叩かないようになってもらいたい．

目　標　①手持無沙汰の時間を軽減させること　②着席での作業活動ができる様になること　③遠隔での指導が可能となること

介入・経過

① 1か月 → ② 1か月 → ③ 1か月 → 現在

①着席の持続性向上と、好きなお菓子の傾向を探す時期：シール貼りを介して認知面の評価や着席しての机上課題に取り組めるように支援．枠内にシールが貼れることが確認できたため、1枚貼る毎にグミや麦チョコ（以下お菓子）などを提供．枠の数を3個、6個と増やし9個全て貼れたらお菓子を提供．

②机上課題のバリエーションを増やし、遠隔指示で作業ができる経験を積んだ時期：型はめやパズルを中心に認知面の評価を継続し、課題の持続性の向上を図った．課題がクリアできる毎にお菓子を提供．次に少し離れた位置で見守り、完成した課題をOTがいるところまで運びそこで椅子に座ってお菓子を提供．

③机上課題から定番作業への変更と遠隔操作の定着を図った時期：円柱の紙製蛇腹の中にステンレスのシリンダー組み込むという事業所の定番作業であるバイクのオイルフィルターの組み立てに取り組めるように介入．カゴの中に紙製蛇腹と、シリンダーを分けて5個ずつ提示して組み立てることとした．作業行動も定着したため、５個完成後に５ｍほど離れた位置にいるOTまで運び、そこで着席してお菓子を提供し．次の課題を手渡して自分の場所に戻り、課題に取り組む手続きを繰り返した．

結果・まとめ

OTとの1対1対応ではなく、部屋担当の職員による遠隔　指示での作業が可能となった．現在は1カゴに20個程度用意したフィルター部品を3セット組み立てることが出来ており、手持無沙汰の時間の軽減につながっている．介入前の半期の工賃は261円だったが、介入後の同期工賃は3,021円と向上した．強度行動障害判定基準の得点は、物壊しや著しい騒がしさが減少し、20点から18点となった．

＊本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている．

No.１１	報告者	峰野和仁　（社会福祉法人復泉会 くるみ作業所）

分野：身体／精神／知的／重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

こだわりの強い自閉症の方に対するスケジュール帳の活用により、作業と生活が安定した事例

年齢・性別：20歳代・女性	**疾患名**：自閉症・知的障害	**手帳など**：

全体像　両親、姉、祖母と５人暮らし。ADLは概ね自立。自他の区別なく様々なことにこだわりが強く、他人のものでも気になると、気になったものを直す、破く、壊す等の行動がみられている。改善できないと次の行動へ移れず、日常生活にも支障をきたしている。作業能力は高い。

希　望　本人）家からお仕事に通い作業をがんばりたい。　家族）穏やかな日常生活の中で、一人で出来ることを増やしたい。

評　価　作業能力は高く１日同一作業を標準個数以上可能。手本を見せることで新規作業導入などは可能。視覚的な情報からのこだわりが強く、いつもとの相違がある事、気になることは改善したい、捨てたいものを壊したりする行動あり。簡単な言語理解はあるが、発語は少なく、ひらがな等の文字や写真の方が理解できる。自分の意思と反したことは、つば吐き、噛みつき等の行動あり。無為な時間が苦手であり、こだわるものを探しに飛び出すなどの行動あり。時間で動くよりも活動が終了後、次の行動に移ることが可能。

目　標　安心して明確な場所での作業と安心した生活（スケジュール通り）を送る。

作業療法計画　場所と活動を明確にし、時間ではなく、終わったら次の行動に移るスケジュール帳を活用できるようにする。（①写真カードを使用、②「作業場所では作業、余暇の場所ではパズルと音楽の選択、食堂では昼食」のように無為な時間をなくしたスケジュール、③活動後にフィニッシュボックスへカードを入れ次の行動へ移る行動の定着）

介入・経過

見通しをつけるため、前もって３日前に、休日明けには実際のスケジュールを見せて使うことを伝え、導入準備をした。導入初日は見本を見せ、一緒に行動することから始めたところ、翌日には自分でスケジュールを活用することができたが、途中で気になることがあると、こだわりがみられ、直す、壊す行動も見られた。可能な限り指定した場所で完結できるよう、前もって指定場所に置くなどの作業準備をすること、移動時には生活支援員が付き添い、納得を得て、こだわるものを生活支援員が直すことを継続した。１か月経過すると作業量が安定し、視覚的なこだわりによる混乱もほとんどなくなった。移動時には、生活支援員に直して欲しいことを「これ」と指差し、生活支援員が直したり視界から外すことで納得し、作業所の安定した生活を継続できるようになった。

結果・まとめ

本人の得意な視覚情報を活用し、場所と内容を明確にすることで安定した作業所の生活に繋がった。また、生活支援員との関係も実体験を通して構築でき、作業所での集団活動に支障なく、生産活動と生活が安定することに至った。

＊本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

No.１２	報告者	藤沢正樹　（社会福祉法人 日本キングス・ガーデン）

分野：身体／精神／知的／重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

強度行動障害の自閉症スペクトラムの方に対して構造化した作業活動を提供し、他害行為などが減少した事例

年齢・性別：30歳代・　男性	**疾患名**：自閉症スペクトラム障がい	**手帳など**：療育手帳B、障害支援区分４

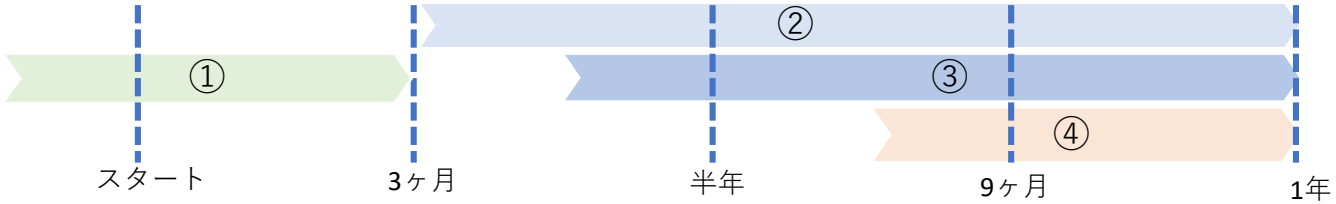
全体像・評価・希望

意味理解は良いが、音刺激に対して過敏で、大声を出す他利用者に対して、パニックになりやすく、他害行為や威圧などの攻撃性を示しやすい。職員などへは「こんにちは」などと挨拶をして、コミュニケーションを取っていることから、楽しく生活したいと考えられる。

目標・計画

ストレスをためずに、事業所で過ごすことができる。パニックや他害行為が起こらず、他の利用者とも協調して、穏やかに生活することができる。

介入・経過



①他ユニットや共用棟で過ごす時間が多くなる。興味のある作業を行い、ストレスの軽減、居場所の確保を目指し作業療法を開始。
②作業療法の環境等に慣れてきたため、構造化した作業活動へ移行。カレンダーの使用、実施場所の固定。
【作業手順の構造化】：見通しがつくよう工夫。写真による手順の提示。反復動作、手順が提示しやすい、エコクラフトを選択。
③作業療法の時間が楽しみとなり、好きな作業活動を行う時間を作ることで、ストレスが軽減、他害行動はなくなった。
④洗濯物干しなどを行なう役割を作り、作業療法士と一緒にユニットで過ごす時間を徐々に増やす。

結果・まとめ

特定の他利用者の声などに反応することは変わらない。しかし、自分からその環境を離れ、攻撃性は減少。「行動の融通性の改善」ユニットでの役割を得て、そこで過ごす時間が増えた。自閉症スペクトラム障がいは、環境の変化に弱いが、反面、先の見通しを示すことで、作業能力を向上させることができる。今回、定時に見通しがついた作業活動を行うことで、ストレスの軽減がはかられ、行動障害の改善に繋がり、ユニットで過ごす行動に結びついた。＊本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

No.１３	報告者	荻野由佳　（多機能型事業　小さき群の里事業所）

分野：身体／精神／知的／重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

ストレッチ動作への緊張が環境調整とポジティブフィードバックにより和らぎ、移動や情緒の安定に繋がった事例

年齢・性別：50歳代・女性	**疾患名**：知的障害、脳性麻痺	**手帳など**：療育手帳A、障害支援区分6

全体像　生活介護施設に日中通所し、基本的な身体的動作は自立。半年前に右膝裏を打撲以降、跛行がみられ、膝関節伸展制限が生じた。以前から看護師と体操を行っていたが、膝のストレッチを行おうとしても嫌がり、改善につながらなかった。リハビリとして、日中週5日20分程度個別に身体介入ができる時間が設けられている。

評　価　右膝関節伸展-30°。受傷後1週間程で痛みが無くなったようであるが、跛行（右立脚期が短く、歩幅が小さい）や立位時左への重心の偏りが見られた。乗車時は支持物と職員の手に掴まり、勢いをつけて上る。四肢体幹頭部に振戦あり。特定の他利用者の情緒的な変化に反応し全身の筋緊張が高まる。簡単な指示は理解でき、発語不明瞭ながら「はい」という返事や簡単な言葉であれば模倣可。怒りやすく、特に自分の流れに沿わない指示に対し眉間にしわを寄せ大きな声を出す。一方歌が好きで、作業場所に流れているCDに合わせ大きな声で歌う姿が良く見られる。日中は主に座位で机上作業を行い、送迎ワゴン車の乗り降り時、また作業所玄関口等にて周辺物に掴まり約30㎝の段差を昇降する必要がある。

希　望（以前の全体像より推察）楽に動作を行い、元気に作業に取り組みたい。

目　標　リハビリを楽しんで取り組めるようになる。右膝関節伸展制限の改善。

計　画　①ストレスを発散できるリハビリ環境の調整②予定、表出手段の伝達③ポジティブフィードバック④ストレッチ（関節可動域訓練)

介入・経過

①ベッドでは、他利用者の声出し等あるとCDの音が聞こえなかったため、ベッド脇に新たに音楽機器を設置した。ベッド近くに対象者が緊張しやすい他利用者が来ないように、生活支援職員に協力依頼した。⇒音楽に気づくと音楽機器を指さしリズムをとったり、ストレッチ中に歌ったりしていた。音楽なしの場合と比較して、拒否の表出が減少した。

②リハビリの内容を毎回伝え、痛みが予想される場面には、痛みが発生した際は痛いと教えてくれるようにと伝えた。⇒突発的に怒って声を出すことが少なくなり、次の動作への切り替えが容易になった。

③ストレッチ運動の後、リハビリを頑張っていること、徐々に良くなっている事をこまめに伝えた。⇒笑顔で返事を返す様子が見られた。作業中、他利用者の声出し等に対しイライラしている様子が多い時期も、リハビリ後に作業に戻る際には笑顔で、集中して作業を再開する様子が見られている。

④①～③を実行しながら、他動的にストレッチを行った。⇒歩幅が増大し、左右差がほぼなくなったことで、歩容が改善され、生活面でも屋外歩行、段差の昇降も介助なくスムーズに行う様子が見られるようになった。

結果・まとめ

介入開始後4か月経過時点にて、右膝関節伸展の関節可動域は、-30°から-5°に改善され、移動の際も動きがスムースになった。他利用者に影響されイライラした様子であっても、リハビリ中は気分転換が図れ笑顔が多く見られるようになり、情緒の安定につながった。

＊本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

No.１４	報告者	大谷将之　（障がい者支援センター「てらだ」）

分野：身体／精神／知的重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

日常生活を無為に過ごしていた方がお菓子作りを通して活動性が向上した事例

年齢・性別：６０歳代・　女性	**疾患名**：統合失調症	**手帳など**：精神保健福祉手帳2級、障害支援区分４

全体像　施設入所中であり、日中は共有スペースにあるソファーで横になって過ごす。プログラムに促しても「しんどい」と拒否することが多い。ＡＤＬは自立。現在の認識に対して「このままでいい」「困っていることはない」と話す。

評　価　作業機能障害の種類と評価（Classification and Assessment of Occupational Dysfunction;以下CAOD）を用いて，作業機能障害の種類と程度を評価した．①作業不均衡14/28点，②作業剥奪11/21点，③作業疎外18/21点，④作業周縁化14/42点であり，特に作業疎外（日々の生活行為に意味を見出せない状態）の程度が強く，「毎日を無駄に過ごしていると思う」と発言が見られた．作 業の潜在化した意味を共有するためにナラティブスロープを実施した．過去から現在までに至る出来事と出来事の間で上向きになる部分に着目 し，共通要素を本人と分析すると【人に役に立つこと】が健康に結びつく作業の意味であることが理解できた．

目標・計画

現在の環境下で実施出来る形態を検討し，「お菓子を作り他者にふるまう」ことを目標とした．振る舞う対象は，当施設で実施している運動プログラムの参加者とした．作業の主観的な変化を捉えるためカナダ作業遂行測定（Canadian Occupational Performance Measure;以下COPM）を実施し，重要度8 /10，遂行度3/10，満足度3/10であった．「やりたい気持ちはあったが，自分にそんな能力があるのか分からなかった」と話した．

介入・経過

お菓子作りは簡単に出来るものとしてゼリーを提案すると，「これだったら出来るわ」と話し，意欲的に取り組んだ.ゼリーを振る舞った際に他入所者から感謝されると表情を緩ませた．また，他入所者に一言お礼の手紙を書いてもらい，本人に渡した．１枚1枚丁寧に読み，「人の役に立つことは嬉しいね」と話し，その後も「いつ次お菓子作りしようか」「今度は違うゼリーの味にしようかな」と自ら調整を行うことが見られるようになった．

結果（3か月後）

CAOD：合計39/112点（作業疎外11/21点，作業剥奪8/21点，作業不均衡12/28点，作業周縁化8/42点),COPM：遂行度3/10，満足度9/10であり，「皆に喜んでもらえて嬉しい．もっと自分で出来るようになりたい」と話し，日中はプログラムの参加が増える等の変化がみられた．

＊本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

No.１５	報告者	脇光玉恵　（障がい者支援センター「てらだ」）

分野：身体／精神／知的重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

明確な目標が日々の生活に影響を与えた事例

年齢・性別：６０歳代・　女性	**疾患名**：統合失調症	**手帳など**：精神保健福祉手帳2級

全体像・評価　精神的に調子が悪くなると、漠然とした不安感が増強し、職員への確認行為が増える。またストレスがたまると口が歪んだり、ヒステリックに大声を出すこともある。外出して買い物するのが楽しみでストレス発散法。行動がゆっくりで時間がかかるため、プログラムへの参加が大幅に遅れるか、ほとんど参加できない状態。

希　望　8月にあるカラオケ大会で山本リンダの「狙いうち」を上手に歌いたい。

目　標　CDラジカセの使い方を覚える。「狙いうち」の歌詞を覚え、ダンスを考える。体調を整える。

計　画　①ラジカセの使用方法の習得　②歌詞カードの作成　③ダンス映像の準備
④プログラムへ参加する　⑤規則正しい生活の継続

介入・経過

①ラジカセは施設のものを貸出。ボタンに数字や単語（すすむ・もどる）を貼り、操作順が理解できるように環境設定を実施。覚えるまで頻回な確認行為があったが、シールを貼ったことで３回で可能になった。

②漢字が苦手なため、平仮名の歌詞カードを作成。自室で曲を聴きながらそのカードを見て歌えるようになった。

③映像をDVDにしたものを職員で準備、歌詞をおおむね覚えた時期から、デイルームで鑑賞。見ながら踊りを真似る。

④DVDを見るため、覚えた歌詞で歌うため、カラオケの活動への参加が増える。それに伴い、他の活動への参加も遅れることなく参加できることが増える。

⑤朝早く目覚めたときに、自室で曲を聴きながら歌っているよう。以前は再度寝てしまい、朝食に遅れていた。また歌うことでストレス発散できているのか、確認行為や訴えも減る。

結果（3か月後）
新しいストレス発散方法を会得し、確認行為が減った。明確な目標があることで意欲が継続し、日々の行動や活動、生活に変化が見られ、落ち着いて生活できるようになった。

＊本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

No.１６	報告者	非公開

分野：身体／精神／知的重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

入院による身体機能低下から、生活能力が改善し、単独での受診・外出も可能となった事例

年齢・性別：５０歳代・男性	**疾患名**：統合失調症、腰髄損傷	**手帳など**：精神障害者保健福祉手帳・身体障害者手帳 障害支援区分3

全体像　生活介護施設入所利用者。腰髄損傷による左下肢随意性低下・足関節背屈制限・尖足あり、移動はロフストランド杖使用(自立)。ADL自立。単独での受診・外出可能。X年Y月、居室で転倒し病院に救急搬送され、悪性症候群・高アンモニア血症で1か月間入院となる。退院時、移動は車椅子使用。歩行は不安定で下肢装具＋歩行器かロフストランド杖で一部介助～見守りレベル。

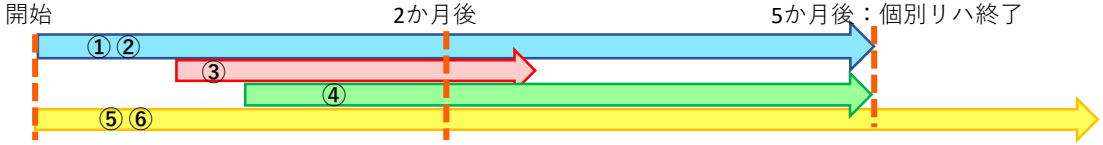
希　望　本人)　歩くのは、怖くて前のようにできない。まずは筋力を上げたい。

評　価　立ち上がりは上肢の支持がなければ難しい。立位バランス不安定。ロフストランド杖使用での歩行は下肢装具がないと怖いとのことで実施不可。入浴時の浴室内移動はシャワーキャリー使用し、シャワー浴のみ。通院は車椅子使用し施設職員付き添い。

目　標　短期目標…ロフストランド杖歩行自立、入浴時の移動(裸足歩行)の自立
長期目標…外出・受診が単独でできるようになる

作業療法計画　①筋力増強運動 ②立ち上がり・バランス練習 ③歩行練習(杖・裸足) ④段差昇降練習 ⑤自主練習 ⑥作業活動

介入・経過



①下肢・体幹筋力増強運動　②立ち上がり・立位バランス練習　③ロフストランド杖を使用した歩行練習→開始1か月で杖歩行自立となる。屋内歩行自立後、浴室での裸足歩行練習(杖・つたい歩き)を実施。杖歩行自立から1か月ほどで浴室内での杖・つたい歩きでの裸足歩行可能となる。※①②③④は週2回の個別リハビリ時に実施
④受診先の病院や外出先を想定した段差・スロープ昇降練習→開始3か月で病院受診単独で可能。その後外出も可能となる。
⑤集団での体操や歩行訓練への参加・重錘を使用した下肢筋力訓練・立ち上がり練習を自主的に実施。⑥作業活動の時間に本人の好きな写経の実施。※⑤⑥はほぼ毎日実施　→生活リズムが整い、活動性の向上につながった。

結果・まとめ

活動性の向上や筋力向上により、歩行に対する恐怖心がなくなり、ロフストランド杖使用した歩行可能となり、入院する以前の生活に戻ることができた。現在は施設内は独歩で歩行され、1か月に1回程度単独外出をされ、楽しまれている。

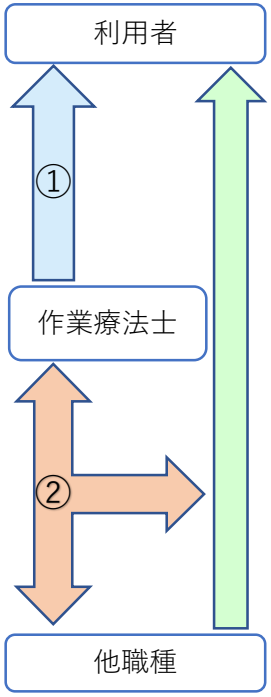
＊本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている

No. １７	報告者	今井佳典　（社会福祉法人大平台会 都学園）

分野：身体／精神／知的／重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

高齢化が進行している知的障害者施設においての作業療法士の働きかけ

課　題　入所者の高齢化：近年知的障害者施設においても高齢化は課題となっている。当施設においても、65歳以上の割合は、我が国の高齢化率同様の29%となっている。



作業療法士の役割

身体的アプローチが中心ではなく、施設で利用者が安全に暮らせ、他職種が支援しやすい環境が整うような働きかけが、何よりも求められている。

①利用者への直接的介入

・個別リハビリテーションの実施：１人の利用者につき基本週２回の個別リハビリテーション実施。知的障害者の場合、動作理解困難のことが多く、集団ではなく個別にて対応を行う。
・歩行器又は自助具等の選定：適した車椅子や装具の選定、義肢装具士との円滑な情報交換、補助金等の活用を他職種に助言する。
・余暇時間の作業提供：知的障害の程度により、細かな作業設定が必要。評価・作業設定をしたうえで作業提供を利用者本人へ直接、または生活支援員と協力して行う。

②他職種(主に生活支援員)との関わり/利用者への間接的介入

・効果的な機能訓練の提示：生活支援員が実施する機能訓練内容を提示又は助言を行う。
・介助方法伝達：専門的な知識に基づき、移動等の自立度に応じた適切な介助方法の伝達を他職種に伝達する。
・リハビリテーション加算：リハビリテーションの効果を提示することで役割や存在意義を提示し認知してもらう。
・入院先への訪問：病院のリハビリテーション職種と情報交換を行い、入院先でのリハビリテーションの状況を把握して退院後の介助方法等を他職種に伝達する。

まとめ

知的障害者施設における作業療法士配置はまだ少ない。配置されていてもリハビリテーション職種がいなかった施設や分野での他職種との連携はとても重要であるが、非常に苦労する場面もある。しかし、作業療法士がかかわれる場面は多くある。高齢化の課題に対応するためにも、作業療法士配置が増えることを期待したい。

＊本事例報告掲載に対し、施設の了承を得ている。

No.１８	報告者	今岡慎一郎　（社会福祉法人神戸あゆみの会 障害者支援施設あゆみの里・障害福祉サービス事業所なごみの里）

分野：身体／精神／知的／重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

姿勢崩れの見られる利用者に対し食事をしやすくするため、シーティングに介入した事例

対象の全体像・評価

体型に合った椅子でない為、安定した姿勢の維持が難しい。不安定な姿勢が影響し、食事中に傾眠状態にある事もある。自力摂取がしにくく、食事介助の頻度が多くなっている。また、姿勢崩れにより安定させた椀の把持が行いにくい事も自力摂取の減少につながっている。

目的

利用者個々に食事のしやすい姿勢を維持する。

介入

①　利用者個々に椅子座位を観察し、足台型・クッション型を決定する。

②・足台型は、床面と足底の距離を計測して足台の高さを決定する。
　・足台と椅子脚を丁番で固定しマジックテープを使用し、折りたためる。
　(セッティングは利用者本人が行う。)

③・クッション型は足底が床面に接地できる座面の位置を測定し決定する。
　・椅子の背もたれと腰部の距離と、椅子座位時での体幹中間位の姿勢維持が保てるクッション厚を決定する。
　・材料は段ボール、発泡スチロール、高反発材を使用

（例）

結果・まとめ

食事摂取時間が50分から1時間程度が30分から40分程度に短縮した利用者も見られ、自力摂取は主食（米）でよく見られる。椀も軽量の物に変更した事も起因していると思われる。また、自分専用の道具・器具であることに特別感を感じ、その為、食事時間を楽しめ、それが摂取量の増加に影響している利用者も見られる。管理栄養士からも食事摂取状況の改善が見られるとの報告を受ける。

＊本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている

No.１９	報告者	佐々木充直　（特定非営利活動法人かたつむり　いちご）

分野：身体／精神／知的重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

脳性麻痺者に対する二次障害の予防の取組み

対象の全体像　当事業所の利用の脳性麻痺者が５名（うち四肢麻痺４名）タイプは、痙直型が１名、アテトーゼ型が１名、混合型が３名。

評　価　全ての利用者に頸部の筋緊張の亢進が見られる。２名は側弯症を併発。

希　望　筋緊張の更新に伴う二次障害の予防。

目　標　頚椎症、股関節脱臼・亜脱臼の予防。側弯症の進行の予防。

計　画　週１回、30分～40分での筋緊張の亢進の緩和のためのROM訓練やストレッチ等を行う。

介入・経過

①頸部の筋緊張の亢進の緩和：頸部については神経や血管等が集中するため、慎重な処置が求められる。筋緊張が亢進している筋（胸鎖乳突筋に多い）に対してピンポイントで筋緊張の亢進の緩和を行い、頚椎症の予防への対応を継続して行っている。また、この処置によりATNRの出現の軽減にもつながっている。

②股関節脱臼、亜脱臼の予防：特に痙直型の利用者の場合、両下肢の内転、内旋がみられ、痛みの訴えもあったが、内転筋群を中心に筋緊張の緩和のためのリハビリを行ってきた結果、介入して１年後くらいから痛みは消失し、筋緊張の亢進も抑制されている。他の利用者にも現在、股関節の脱臼、亜脱臼の兆候は見られていない。

③側弯症の進行の予防：椅坐位でのバランス調整や骨盤の矯正、反対側へのストレッチなどを行っている。２名に対して10年ほど関わっているが、現在は症状の進行もなく安定した状態を維持している。

長い利用者には１０年程関わってきたが、何れの利用者にも二次障害の兆候は見られていないが、年齢が30歳代後半の利用者が多く、今後二次障害を発症しやすい時期にきており、継続した関わりが必要である。

結果・まとめ

脳性麻痺者の場合、療育センターの利用が終了してからは通院の負担などからリハビリを受ける機会が殆どないのが実態である。生活介護へのリハビリ職の配置で、継続した機能維持を図ることが出来る。

＊本事例報告掲載に対し、対象者からの同意を得ている。

No.２０	報告者	知念和紀　（沖縄中央成育園 あおぞら荘）

分野：身体／精神／知的／重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

重度障害者支援施設における手洗い支援

対象の全体像

入所施設で生活している男性利用者（３８名）の障害支援区分は平均５.８、ほとんどが言語的なコミュニケーションは不可、半数以上に重い行動障害がみられる。なかには不衛生な行動（手を舐める、便器の水に触れる、肛門いじり、弄便など）をみせる利用者も少なくない。汚れが確認できれば対応し、食事前にはアルコール消毒を実施しているが、胃腸炎などの感染を受けると徐々に感染者が増え、寮内隔離での対応せざるを得なくなり終息するのに時間がかかる。また保健所から手洗いを習慣化するようにと助言があった。

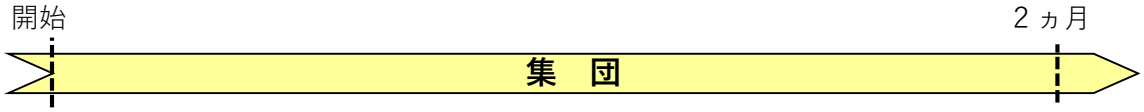
評価

利用者は洗面所への誘導の目的を理解出来ず、職員の誘導に苛立ちや混乱をみせる。手洗い支援する事に時間と手間がかかる。

目標　無理のない手洗い支援

計画　移動式の手洗い洗面台を製作し、昼食前に手洗い支援を実施（次亜塩素酸水で流水のみ）

介入・経過



前期：洗面台カートを確認すると飲み物と勘違いし、近づく利用者もいた。動かない利用者は本人のもとへカートを移動して対応した。自主的に行うも不十分で介助が必要な状態であったり、手洗いの目的を理解できず戸惑う利用者もいた。

後期：手洗いと理解して自主的に集まるが不十分な手洗いは続いた。戸惑いをみせていた利用者は介助される事に嬉しさを感じる方、拒否をみせる方に分かれた。食事前の手洗いだけでなく、トイレ支援後の手洗いも意識するように会議で周知した。

結果・まとめ

視覚情報処理が優位な利用者にとって移動式洗面台は特性を活かした支援といえる。しかし手を洗う意味やいつまで洗えばいいのかという洗い方の手順を伝える難しさを感じた。今後は洗う箇所やポイントをイラストで表示し、伝える工夫を検討したい。

＊本事例報告掲載に対し、施設長からの了承を得ている。

No. ２１	報告者	今岡慎一郎　（社会福祉法人神戸あゆみの会）

分野：身体／精神／知的／重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

ロールピクチャーの制作を通し楽しみの獲得、自己表現の拡大につながった事例

対象の全体像・評価

障害支援区分6：4名、区分5：5名、区分4：2名　平均5.2
オープンの場での個別の活動時に、興味を示した利用者、興味を自分から言い出せない利用者、参加を訴えた利用者などを10名程度選び、目的別に1～2名のグループ別に実施

目的・介入・結果

目的	介入	結果
①興味の拡大	**興味の掘り起こし** ・興味が持てるよう視覚的な提示をし、参加を促す ・できたことへの称賛を行う	・目の前で行うことで、覗き込むなど興味深くみている様子が見られた際に、作業を促し、出来たこと、作品に対して周囲からの称賛を得ることで喜びの気持ちとともに、作業の定着へとつながった。
②自己要求の表出・自己表現の拡大	**自己要求の表出・自己表現の拡大の促し** ・利用者の性格に応じてクローズ・オープンの場を選択し、表出や表現をしやすい環境を配慮する	・「作業をしたい」「今度いつする？」と会うたびに聞く、作業中に鼻歌を歌う、自分から「楽しい」と声にするなど、今までに見られなかった表出が各利用者に見られた。 ・制作中の作品を抱きしめて笑う、手に取って見つめる、手に触れ感触を楽しむなど、作業や作品に対しての満足感・愛着感・楽しさなどの様々な表出が見られた。 ・ロールピクチャーが自分だけの特別感のある作業と捉え、作業に注目される事・称賛を得る事などを求める事が動機づけとなっている側面も見られる。
③見学（外出）への動機が高まる	**見学（外出）への動機づけ** ・作業ごとに出展見学をを行うことを伝える	・作業ごとに作品の出展見学を伝えたことが、外出への動機づけとなり、完成させる事への楽しみとなった。更にその後も作品を完成させ、作品出展することが楽しさや外出のモチベーションとなった。
④作品の完成度を高める	**空間認知へのアプローチ** ・同じ色のところに貼る、隙間を埋める貼り方の理解を促すため、カラーの下地を使用	・貼る位置を示し、色の境目を画用紙で壁を作る事で、間隔や隙間を空けない事、同じ色に張り付けることが理解できるようになり、サポート無しで行えるようになった。 ・ロールが倒れないように、ロールの側面にもボンドをつけて側面同士を貼り付ける事を自分で気付き実施する様子が見られた。
⑤麻痺側上肢の日常的な使用	**麻痺側上肢の使用の促し** ・資材を右側に配置	・右麻痺者の右上肢使用が、歩行時の動作にも出現しだし、歩行の安定性に繋がりだしている。

まとめ

「OTは作業や活動を提供してくれる人」「一緒に活動してくれる人」などの認識を持ち、自分から「作業をしたい」と言葉や指差し動作などで伝えたり、資材等を持って歩いていると近づいて作業を期待する場面も見られ、個々に応じての表出方法は違うが、表出場面が以前より見られる。

＊本事例報告掲載に対し、対象者からの了承を得ている。

No. ２２	報告者	山本智美　（さいたま市社会福祉事業団）

分野：身体／精神／知的／重心／その他	形態：個別／集団／連携	内容：生活機能の獲得・維持・向上／活動・社会参加の場の拡大／高齢化対策／適応に向けた取り組み／環境調整／その他

意思決定支援とグループ活動を通して拡大した利用者の主体的な活動と参加
ー他職種連携で行った5年間の意思決定支援のプロセスー

対象の全体像・評価

20 歳～64 歳のADL 自立～一 部介助,知的機能は象徴～概念化水準以上(LDT-RⅢ-2 以上),動作の即時模倣が可能な知的障害者13 名を対象とした．ADOC(作業選択意思決定支援ソフト)を使用し,自分でやりたい作業や目標を選択してもらうが,5 名は選択に至らなかった.また,選択できてもいつもしている作業以外は選択されず『危ないからだめ』『手を出してはいけないと言われている』等と語り,制限から多くの事が未経験で,具体的なイメージに繋がらず,本人の意思を表出・形成する部分でのつまづきもみられた.また施設では本人の意思を聴取されること自体少なく,個別支援計画は主に家族の意見と職員の意見を合わせ作成されていた.

介入経過

	連携して行った介入内容	作業療法士の関わり	変　　化
第1期 **様々な経験・イメージ獲得** (０か月～4年)	様々な生活活動を体験するプログラム（生活体験プログラム週1・年56回）趣味活動、意思決定の機会、家族への伝達	プログラム発案・実施、生活体験ノート・ワークの作成、個別の能力に関する評価・支援方法の提案	1 年後聴取したADOC では13 名中11 名が選択でき,明確な意思の表出や興味の拡大,選択した作業から具体的な内容を表出といった変化が見られた.
第2期 **個別支援計画の反映と実施** (6か月～5年)	個別支援計画に評価を落とし込み個別の配慮を行いながら実施、体験プログラムの継続、安心して失敗できる環境づくり	プログラム発案・実施、作業・活動・環境評価、支援方法の提案、自助具などの作成	成功体験・失敗体験を含め,計画が達成されることで自信,新たなことに挑戦したいという気持ちが生まれ、主体的な参加が増えた.
第3期 **グループ活動計画の反映と実施** (2年6か月～５年)	自分たちグループの活動を自分たちで決められるよう、内容についての情報提供する場を設定する。	決定事項への情報提供、話し合いのファシリテート・記録、方法の提案、交渉、支援方法提案	職員の手を借りながらも自分たちのことは自分たちで企画実行するプロセスを踏むことで,自分の意見を皆の前で意思を示し発言する一方で意見を譲る,周りの人のことを思いやり、助け合うことが増えた.

結果・まとめ

意思決定の前提として、意思形成支援(様々な活動のイメージを付けること、自身で行いたい作業を選択していく経験)が重要。作業療法士が知的・認知・身体機能や目標となる作業や環境の評価を実施し、環境調整を含めた支援方法を家族や他職種で共有し行うことで、より効率的・効果的に行うことが出来た。結果、利用者の意思を引き出し、個別支援計画に反映するだけでなく、目標達成することで利用者自身の自己イメージが良好となり、主体的な参加を促した。また、自分自身の事に対する決定だけでなく、所属する集団の事への決定へと質的な転換も促すことができた。

＊本事例報告掲載に対し、施設からの了承を得ている。